2026_0414「武蔵野台地のニリンソウ」日々の理科 4265 号

お茶の水女子大学　サイエンス＆エデュケーション研究所　田中　千尋

・

職場の構内の一角に広がるニリンソウ（キンポウゲ科 *Anemone flaccida*）は、一本の茎にふつう二輪の花をつけることからその名がついた植物です。毎年４月になると、１００輪を優に超える白い花が一斉に咲き、短い春の林床を静かに彩ります。足を止めて意識しなければ見過ごしてしまうような場所ですが、そこには確かに、武蔵野の原風景の一端が息づいています。

この群落が成立しているのは、武蔵野台地の中でも小石川舌状台地の段丘崖にあたる位置にあるためです。台地上は一般に水はけのよい乾燥した環境ですが、段丘崖の下部や縁辺では地下水がしみ出し、土壌に適度な湿り気が保たれます。ニリンソウはこうした湿潤で、かつ落葉樹林に覆われた半日陰の環境を好むため、この場所はまさに生育に適した条件を備えているといえます。

また、この群落は敷地の端に位置しているため、人の往来が少なく、踏み荒らされることもほとんどありません。その結果、毎年安定して開花し、群落としてのまとまりもよく保たれています。都市の中にありながら、人の目から少し外れた場所で守られているという点も、この景観の成立に大きく寄与しているのでしょう。

武蔵野台地本来の植生は、こうした微地形と水分条件に強く規定されています。ニリンソウの群落は、そのことを静かに物語る存在であり、都市化が進んだ現在にあっても、なお残された貴重な自然の証といえます。この場所に立つと、かつての武蔵野の林がどのようなものであったかを、具体的に想像することができます。

（2026 年 4 月中旬／文京区・お茶の水女子大学構内）